

紙上講座 一

百年ほど昔、沢入駅から賽の河原への道々の記 その3

〜岩澤正作氏著『渡良瀬川峡内澤入塔見聞記』より〜

講師 藤井 実さん（東町花輪）

下山路と小田巻の淵

昼食をおえ午後一時に下山の途についた。南方の峰に上り東腹をたどって滝の下までおりてきた。

案内者の話によると、アツモリソウはないが、クマガイソウ

は沢山あると言うのだが、一向に見当たらない。どの辺に多いのかと聞けば、あたり一面にあると言いながら、案内者の指す方向見ると、似ても似つかぬバイケイソウである。これは違うと云へば、この辺ではこれをそう呼んでると言う。

地方名と言ひ争う限りではないが、バイケイソウは百合科に属し、クマガイソウはアツモリソウと共に蘭科に属す。共にふくる状の旗弁があり、一見フグ

リに似ている所からいずれもフグリバナの方名さえある。

また、アツモリソウに葉はやや似ているが、クマガイソウの葉は全く違っており、地上茎の中部にフキの葉を左右からつけたような形している。

しかし、黒保根村ではクマガイソウもアツモリソウも共に、本来の呼び方をしているようである。このことは、廿四日に栗生山登山の時に確めた。

六月五日に庚申山に登った時には、庚申山や足尾附近でもバイケイソウをクマガイソウと呼んでいる。

要するに茎や葉がアツモリウに似て雄々しい所からそう呼んでいることを確かめられた。

こうした次第で聞いただけで

は書くことはできない。どうしても私等の行くべき道は足にまかせるとより仕方がないのである。

豊国主幹が「手マメ」「クチマメ」「アシマメ」と言われたが、全くその通りである。

但しアシマメにするにはオアシの入用なことに閉口する。

そんじよそこらに義俠客はいないでしようかねとか、植物の区別や、徳川家の御紋章フタバアオイなどの話をしながら下ってきたので一時四十五分釈迦岩に着いた。

不動滝の下方西山方面への岐路の一丁ばかり下から右折して間道に入り、板倉川を渡り右岸に出ると、絶壁の中腹に岩窟がある。窟中に蚕影山神を祭る。

数丁で部落に出て左岸に移り、畑道を横ぎり縣道に出て、

渡良瀬川の河原に下り、「小田巻の淵」を視察した。

淵は村社東宮神社の下、東宮橋の北一丁ほど渡良瀬川の右岸の河原の中に突出する花崗岩の露頭の下にある。

昔は河中に「小田巻石」なるものがあつたそうであるが、今は砂礫のために埋没したのか、下方に転流したか、今は見ることはできない。

小田巻石とは、花崗岩中に縦横に石英脈あつて、丁度糸巻のような形をしたものらしい。

淵の上から岸に向つて一脈の露頭がある。此の露頭の各々は、もともと連続していたものらしく、一筋の石英脈が連つていたようだ。

地元の住民が此の脈に目をつけ、小田巻石から出て澤入塔に連つていと言ひ、例の古歌から「笹蟹の糸」などと詠んでいる。

※古歌「旅人も繰り返し見る
小田巻きの沢越しに引くさ

ゝがにの糸」

(弘法大師の詠歌という)

また対岸の渡良瀬川左岸の杉森の中に一大岩塊が立っている。これが沢入塔の台石であると伝えている。

案内者が言うには、沢入の河岸には無名の名石が沢山あったが、採石のためだいぶ少なくなつた。

橋の袂には突出した岩があつて一層景色の美しさを引き立たせていたが、先年払い下げられ採掘されたので風景の趣きを損ねてしまった。

オカミでは何か取締をなされたらよからうに思うと案内人は言う。この考えには私も同感である。

この台石も、何百円とかに値がついていたが、持主が五百や千の金は何んになる。昔から伝わる名石に手を付けてはならぬと、勇ましい発言をしているか

ら安心だと喜んでいた。

さすがは持ち主殿よと、私も心嬉しく感じた。

空海に関する傳説

空海は我が毛州の地に靈地を求めて、毛野(けぬ)の高野山にしようと、先ず上毛の名山赤城山に登つたが、赤城の神に一谷隠され、大師の理想とする百谷を数へられなかつたので、心から念じていると、ある夜東方に不思議な光を見た。きつと仏様のお導きくださる所であろうと、袈裟丸山に登つた。

ところが、空海の徳が足らなかつたのか、修行が不足したのか、袈裟丸の神も、大師ですら山を開かせることをゆるさず、又々一谷を隠してしまった。

大師はここでも開山することができず、夜中下山の途についてた。

するとはるか下方に奇怪な青

白い炎がしきりにりに怪しく燃え、亡霊の忍び泣声さえ聞こえてくる。

それをたよりに進んでいくと、たくさん石積みがあつたと、そこには多くの亡者が石を積んでいた。

弘法大師は、彼等のために念仏供養して成仏させたのであつた。それが今の「賽の河原」であるそうだ。

大師は山を下り、ある岩窟の内に一夜を明かそうとした。夜半には雷がしきりに鳴りとどろき、たたきつけるような大雨が降り、天地も崩れんばかりであつた。

さすがの空海も大分閉口していた時に、下方の谷に靈光を認めた。

翌朝、その方角をたどり下り遂に塔の澤に至り、自然石に彫付けられた釈迦の寝姿を見付けたと伝えている。

私がこの話を聞いたのは大正三・四年頃の事で、大部記憶が薄れてしまった。

賽米の塔、その他に関する口碑もあつた筈であるが、今思い出せない。

空海の伝説は、赤城山にも、其の東麓の黒保根にも、又コジヤ峠を越えて根利にもある。

中島君の筆法でいくと、空海は赤城山から鳥居峠を下り、上田沢を経て利根の根利に出て、根利谷から袈裟丸山に登り、塔の沢に下り、足尾に出て日光山中へ入り込んだように思われる。

弘法大師行脚の道筋は中島君に御願ひして、私の道々の記はここで書き終えることにする。

~~~~~  
岩沢氏はこの著の中で「東道を訪ねる旅人に役立つことができらぬなら、この上ない喜びである」と記している。次回は、紙上講座Ⅱ「小中川溪谷」です。